

# 後藤朝太郎の日中民族性比較論 ——ある支那通の日本人批判——

石川 泰成

## 目次

- 1 はじめに
- 2 後藤朝太郎の日中民族性比較論と日本人批判
  - 2-1 後藤朝太郎の中国民族性論の形成
  - 2-2 中国人差別批判
  - 2-3 日本人批判論
  - 2-4 軍部批判
- 3 後藤朝太郎評価の再検討
- 4 おわりに

附：後藤朝太郎著作目録（単行本）

## 1 はじめに

漢字研究者として出発した後藤朝太郎が、漢字の総合的研究を進める必要性から、従来の「漢学」を乗り越えて、総合的な中国学研究を構想するようになった。その構想実現のため中国文化に関する現地調査をしばしば行ない、中国事情、中国趣味の紹介の著書を多数発表するようになった。論者は後藤の漢字研究から研究対象を移していった経緯を論じ、時局的著作や中国趣味の紹介が「支那学」構想の副産物であることと、当時の日本人の中国及中国人についての無理解を是正したいという心情に発したものであることを論じた<sup>(註1)</sup>。

本論考では、前論文で取り上げることができなかった彼の中国論及中国民族性論と、それと対比される日本及日本人論を考察してゆくものである。また、従来、研究対象として空白であった「支那通」を取り上げることが、戦前日本人の対中国認識の実情分析に有意義であることもあわせて論じてゆくものである。なお行論中、論者が支那人、支那論、支那通など「支那」という語を用いることがあるが、あくまで当時の用語であって、論者自身になんら意図があるわけではないことをあらかじめ言明しておく。

## 2 後藤朝太郎の日中民族性比較論と日本人批判

### 2-1 後藤朝太郎の中国民族性論の形成

明治42年に1520頁にも及ぶ『文学の研究』をはじめ、漢字研究の著書(著書目録No.1~14参照。本論文中、後藤朝太郎の著書の引用についての書誌情報は、末尾に付した著作等目録の通し番号にて表記する。)を出版して、学界で脚光を浴びた新進気鋭の漢字学者後藤朝太郎は、大正3年台湾総督府の依頼を受けて、中国人留学生の世話、監督をしたり、同じく台湾総督府の依頼で台湾の現地調査を行ったりして現実の中国に触れた(著作目録No.18『現在の台湾』はその報告)。漢字研究を一層深めるため漢字を学びだした中国に足を運ぶようになった。そこで漢字研究には中国文化全般の理解が必要であり、中国文化を論じるには、中国文化の構成員である中国民族の民族性の正しい理解なくして中国文化研究は出来ないと考えた。

たとえば、大正7年に出版された中国文化全般に関する最初の著作、『支那の文物』(著書目録No.15)では、まだ「支那人を全体として観た支那民族の観察に就いては自分は未だたしかな結論を述べることは出来ない。」(同上書, p.57)としながらも、いくつかの中国人論を展開しはじめた。「凡そ支那には時代に伴ふ幾分の相違はあるものにして日本人の目には確然日本の国民性から区別さるべき国民性が認められ、又趣味から言っても矢張り支那特有の趣味が存しているような気がする。」(同上書, p.4)と述べ、その「異文化」としての中国と中国人を感じている。ここで「支那特有の趣味」といっているのは、中国民族の指向性のことであり、彼は、時代の変化にも変わらぬ中国、持続する文化的底流を重視し、その把握は「日本の島国には日本人特有の国民性と云うものが発達してある。之と同じわけで支那にも其れがある。支那人は抑如何なる国民性を有するかと云ふ点、是が眼目である。」(同上)と中国文化・文物の理解に最も重要なのは中国人のこの民族性の理解が必要であると説いた。ところが、対象が「異国」として観察すればするほど、同時に自国である日本および日本人がその対照として浮かび上がり、朝太郎は次第に日中比較、日中民族性比較まで論を及ぼすようになるのであった。

#### 2-1-2 国民性か民族性

後藤朝太郎は従来の日本の中国理解が中国のなかでも少数の上流階級の人たちが残した文物・文化を書物の上だけで理解しようとするため、不正確で不十分な理解しか得られなかったのだとし、中国理解のために分析対象は圧倒的多数を占める中国の下流民・下層民に向けるべきだと説く。後藤朝太郎の考えによれば、本来、国の「中流

階級」が世論を形成し、「中産階級」とは、知識階級を言う。「上流階級」が地主や官僚、大商人といったごく一部の構成員と大多数の農民、商人とで構成されている中国には、国民の自覚を有して生活している階級がないことを問題としている。ただし伝統的中国社会に文人とか読書人とか呼ばれる知識階級があったが、かれらも同じく国家世論の形成に役割を果たせなかったとみなす。(著作目録No19, p.80)

この中国に、国民の自覚を有していない大多数によって構成されている中国社会という認識は、中国という「国家」でなくして中国「民族」ありという中国観を朝太郎は導き出してくる。ただし、中国を「国家」なしとする中国観は彼特有のものではなく、同時代には広く認識されていた。既に明治44年、小川運平『支那及支那人』<sup>(註2)</sup>に「吾人は支那人が過去の歴史と現在に於てその国家にたいする感念の極めて冷淡なるに驚かずんばある可からず、之れ固より彼らの国体と政治思想の、我国などとは根本的相違あるを以てなり。」(p.60)と国家観念が稀薄であることをのべ、愛国心の欠如した「支那人は我利を主義となす」(p.36) 中国人がいるだけだとする。当時の論壇をリードしていた山路愛山もほぼ同じ趣旨を述べている。愛山によれば、他民族に幾度となく征服された「支那は国として存在して居るけれども支那人は国としての共同生活を味つて居ない。」(『支那論』民友社、大正5年, p.6) のであり、「其代わりに彼等は郷党の利害に執着する人民になつた。」と近代「国家」が形成されていない以上、中国にすむ中国人にとっては「支那の一箇の大世界」(同上書, p.8) であるとする。また、徳富蘇峰も『支那漫遊記』(大正7年, 民友社)に、中国は「4千年来、支那は国としても、中央集権の政治を施したるとなく、民としても中央集権の政治に服したるとなし。」(p.436) という歴史的来歴から「支那は一国と云はんよりも、寧ろ一世界也」(p.435) と山路愛山と同様の見方を示している。こうして見てきたとき、朝太郎の「国家」なくして「民族」ありとするは観点は、同時代的見方一般の範囲に有るものと言える<sup>(註3)</sup>。

同時代の日本人から見たこうした中国の国家観念の希薄さは、中国分割統治論や諸外国の植民地化を正当化する根拠として語られる後進性と同義であったが、後藤朝太郎は逆に、

支那人のあたまでは組織的な新しい国家を形成して見たりロシアがロシア式にすべて科学を基調として進んであるやうな行き方をしなくとも優にやつて行けると考へてゐる。(『お隣の支那』著作目録44, p.149)

と国家を越えた生存に適した社会組織(朝太郎の用語を用いれば「自治意識の発達」)を歴史の中から中国は備えてしまっていると考えていた。したがって「国家」以外に自己の生命の安全を保障する単位を中国人民自ら発見し発達させた以上、中国人自身、

国家観念が稀薄なのは当然で「国といふ列国なみの考へ方を適用して批判しようとする事だけは、どうしても無理である。」(『支那文化の研究』著作目録No29, p.678)以上、国家を比較の基準にして国民性を分析しても意味がないであろうと彼はいう。むしろ中国及び中国人を正しく理解するためには彼等の「民族性」なり、構成員である「個人」の気質の特徴をまず分析対象とすべきだといっているのである。

### 2-1-3 後藤朝太郎の中国民族性論

中国人「個人」の気質の特徴をまず分析対象とした後藤朝太郎であったが、この観点から見てたとき彼は、「民国としてよりも民族としての美点」(『支那料理の前に』著作目録No22, p.57)あるいはさらに「其人物個々に就いては遠く我国人の及ばざるものがあると思ふ」(『おもしろい支那の風俗』著作目録No25, p.307)と「民族性」や「個人」の美点の存在を主張するようになる。

中国人に優位あるいは美点を認めてゆく朝太郎の議論は当時の日本としては相当珍しいものであった。そのことは次章節「2-2 中国人差別批判」を設けて論ずるが、今は議論を、後藤朝太郎が都市部以外の「下流民」へのまなざしから得た中国民族性論とはどのようなものであったかを見ていくことにしよう。

大正7年発行の『支那の文物』は書名の通り文物紹介を目的とし、民族性の分析が主題ではないが、後藤朝太郎が中国民族性について語ったもっとも早い時期のものである。

- 1 大規模を好む性情
- 2 形式を過重する性情
- 3 極端なる利己主義 (p.22～) と節約主義
- 4 矛盾の感ある性情 (p.24～)
  - (1) 衛生面での矛盾
  - (2) 公共事業の盛行と利己主義
- 5 支那人の楽天生活
  - (1) 呑気なる態度
  - (2) 矛盾せる態度
  - (3) 不得要領の態度
- 6 氣力に乏しいこと
- 7 天命に従い宿命に安じていること
- 8 支那人の貯蓄重視風習

と言う民族性が出されている。一瞥してまだ後年のものに比較すれば、部分的、主観

的な分析である。ただ、中国文物・美術の特色として1～4は大正14年発行の後藤朝太郎の主著の一つ『支那文化の研究』（著作目録No.29）第13章「支那文物の特色」へ、5の楽天性については第11章「支那人の楽天生活」に再録されていることからわかるように後年の中国民族性論の基調となっている。このうち4の「矛盾せる態度」と記述している点は、観察者が異文化と接触から中国民族性に「矛盾」なる形容を付けたのは、明治44年に服部宇之吉「支那の国民性」<sup>(註4)</sup>が先行し、「冷熱相矛盾せる支那民族」などに見られる議論である。こうした中国の民族性に矛盾の同時存在することを特徴に挙げたものであるが、矛盾が矛盾として意識されるのは、対象に未だ深く切り込めない分析不足が体系的に論じきれないことの告白であり、そのことをもって民族性の特徴とすることは妥当を欠くとする批判は当時からあり、鳥山喜一からなされている<sup>(註5)</sup>。ただ、後藤朝太郎は、この「矛盾」に見える現象こそが中国人の民族性の特徴とし、何もかも体系的に整理しようとするのは「その不整理を整理しようとするのはドイツ流、日本流の頭のもの考へ方である。」（『支那を知れ』著作目録No.97, p.227）といい、方法論として西洋のものを援用するのは「西洋の間に合せの鍵などいくら持ち寄つて来ても、うまく嵌まらない。」（『支那文化の研究』著作目録No.29, p.755）と批判的である。「支那文化の神髓」（同上）は「又、支那之人には矛盾があつたり、不合理の多かつたりする処が見いださるゝようであるが、それが自ら大いなる我、深刻味のある我と云ふものとなつてゐるので、それでよく統一されてゐる。」（『隣邦支那』著作目録No.92, p.263）にあると考えていたようである。この「自ら大いなる我、深刻味のある我」の体現者である中国人を理解するキーワードに「楽天」があるが、この言葉は、中国人を論じた最初の著作にすでに提出している。

支那人と云ふものは一般に「楽天的」生活を営んでゐる。悠々として迫らないところがある。その何となく胸のうちの大きなところがあらゆる点に見えているのは、うらやましく感ぜられる。（『支那の文物』著作目録No.15, p.57）

楽天的ということをも民族性の美点として捉える視点は、同時に、漠然とはしているが、のちの厳しい日本人批判につながる「日本人の学ぶべき点がある点にあると考える。」（同上）と日本人批判の視点を確保しつつあることは注目してよい。

4年後の大正11年（1922）出版の『支那料理の前に』（著作目録No.22）には、彼の民族性論はより網羅的になり、新たに日本と中国との比較にまで論を進めている。まずは中国民族の特性を目次から拾い上げると、

- 1 持久力のあること
- 2 包容力のあること
- 3 同化力のあること

- 4 自己生存の道に長けたること
- 5 急転直下に情態を一変せしむること
- 6 利に敏く打算的なること
- 7 平和的なること
- 8 残忍性を露はすことあること
- 9 体面論を形式的に論議すること
- 10 結論も道程みち行きに重きをおくことあること
- 11 雷同性を発揮すること
- 12 紆余曲折多き、趣味に富めることなど

と項目を立てている。ただし、その論議自体、あるいはいくつかの項目はどこかで誰かが同じようなことを説いている。参考に長谷川良之助『支那国民性の解剖』<sup>(註6)</sup>に項目として立てられているものを抜き出すと、「寛容の徳」「妥協を好む」「体面を重んず」「処世の巧妙」「社交に長ず」「断念に勇也」「利己万能」「実利主義」「射幸心熾烈」「享樂無差別」「事大虐小」「雷同性」「猜疑心」「忘恩癖」「虚飾の尊重」「上怠慢下勤勉」「屈從無恥」「義侠心欠乏」「尚文卑武」とあり、一瞥、その類似性が看取しえる。

このほか、「6 利に敏く打算的なること」で説いている、個人主義的傾向や打算的であるという議論は、山路愛山の『支那論』に「個人主義と拜金主義」等とみえており、それ自体特筆すべき点はないように見える。早くは明治末年に小川運平は、自ら「故に支那を觀、支那人を觀る時は、先づ自己の感情や觀念を去つて、支那人になつた気で觀察せぬと真相が知れぬものがある、」と公正な對外認識に心がけたと自らは豪語しつつ、彼が出した中国人觀が、第21章「支那人雜觀」に収められており、そこから項目だけ拾うと、「一 支那人の不潔」「二 支那人の懦弱」「三 支那人の横着」「四 支那人の空泣」「五 支那人の怠惰」はじめ「ツケノボセル支那人」など全33項目にわたって中国人論を述べている。

これら明治末年から昭和にかけての支那論、支那国民性論といった中国論がこうした種類であり、小川運平に代表される日本人優位の観点から物された中国人論は項目だけから見ると後藤朝太郎のものも同種とも取られそうである。

しかし後藤朝太郎は、日本人と中国人との間に氣質の相違を認めはするものの、中国人を劣った民族とは見ず、「日本人よりも劣つてゐる点ばかりでなく寧ろ進んでゐるやうに思はれる点がある。」(著作目録No15, p.7)と遠慮気味にはあるが中国の優れた点を認める。また、朝太郎にとって中国とは「かくて日本人の欠点弱点とする所はいつもあべこべに支那人士の長所美点とする所となつている。」(同上) ているのであるから、日本が世界に向かつて大いに進展するために中国から学び、日本人の短を補

い「お国の日本の現状を拯ひ、将来の国民の幸福を齎すよう、幾分なりとも利用して貰いたい。」(同上)という。彼にとって一見矛盾する情情を「大いなる我、深刻味ある我」で統一され楽天生活を送る中国人民は、日本民族を映しだす反射鏡の如きものであり、日本批判の原理であった。

そして、この時期に現れた「日中民族性の比較」の論調がほぼ、生涯通じての論調であり、特に満州事変直後までの日本批判の基調となっている。

当時の論調の中で、中国人の優位点を論述する朝太郎の立場が、ある種特異なものであったことを以下見ていくことにしよう。

## 2-2 中国人差別批判

事実、日清戦争、日露戦争に勝利した明治末年の日本の対中国の意識は、対中国軽視、中国人蔑視の風があった。先に見た日本人優位の立場にある小川運平をして「我国に在りて支那を見、支那を評するもの、多くは戦勝の余威を以て彼を待ち、多少の軽蔑の色あり、態度と語気あり」(小川運平『支那及支那人』、東亜堂書房、p.110)と語らしめる状況であり、「其ツケノボセル横着な、横面を拳頭で2つ3つ打撃してやると大に凹んでしまう、少しも抵抗や弾力は無、日清戦争が牙山の役で成敗が定やつたも無理は無、何んだ海東の一小国、此の青2才めと睨んだ、横着豚めが、一閃の日本刀真に夏尚ほ寒しの勢いでやられたから、吃驚、」(p.88)と論じ、一般の中国人蔑視の様子大体が想像つくであろう。大正期の日本の論調もほぼ同じで、たとえば、「支那が我国に対して優位者たり、脅威者たり、或は圧迫者たるの位置にあったが為に、我国は常に支那に注意し、支那に学ぶのを怠らず、以て其の国際関係を維持して来た様な形が見ゆるのであるが、偶ま日清戦争の結果が、我国の大勝に帰し、その後間も無く日露戦争あり、是亦た吾国が大勝を得て、国威俄然として世界に発揚せられ、茲に於て日支の関係は、一時に全く其の優劣強弱の地位を転倒し、……我國民中の軽躁者流は、動もすれば我国の実力を過信し、僅かに20年30年の表面的状況を瞥見して、支那為する無しと軽断し、顧慮するに足らずと速了し、吾が命是れ従はしむ可ちと妄想し、彼に対して大に倨傲不遜の態度を恣にし、」(田崎仁義『支那改造論』、大正15年、p.190~191)と述べている。後藤朝太郎自身、街の声を拾い集めて次のように述べている。

そして大方の日本人の声というものが、「『どうせ支那のことだから』と云つた気分が大抵の場合には伴つてゐたといへるのである。論より証拠今ここに数え上げてみると、例へば、

一、どうせ支那のことなんだから高圧的に臨んでいかななくては。

- 二、どうせ生活費のかゝらぬ支那人どもを相手にやる仕事ぢや構つてゐる心配はない。思う存分やるべしだ。
- 三、どうせ物資の豊かな支那ぢや、とれるだけ取るべしぢや。
- 四、どうせ世界の大勢などわかりっこない支那人どもぢや、構ふこと有りやしない。
- 五、どうせ遅れてゐる支那ぢや、日本は先輩国だぞ。
- 六、どうせ政府のだらしない国ぢや、日本人の言に従ふのが当然じや、日本は東洋の盟主だぞ。日本がゐなかつたらどうする。支那は一日も安閑と行かぬ理屈だぞ。」

(『支那行脚記』著作目録No41, p.202) という有様であったという。先ほど掲げた小川運平『支那及支那人』の一項「ツケノボル支那人」の一句とあわせれば当時の一般の日本人の中国人観の大方がみてとれよう。しかし口を開けば「共存共栄」「日華親善」「一衣帯水」「善隣補車」というきれいなスローガンを掲げている。はたして誰のための親善なのか、誰のための繁栄なのか。全ては日本及日本人にとって都合のよい親善・反映なのではないのか。これでは中国人だれ一人日本人を信用するものはいないだろうと朝太郎は言う(『支那民情を語る』著作目録No55, p.55及び『哲人支那』著作目録No61, p.289~294)。

その証拠に、『中国の日本人観100年史』<sup>(註7)</sup> 繙き、同時代の中国人による日本人論を覗くと、たとえば、「今日までアジア人種が日本に対して同情をもたずにかえって疑念をいだいたのは、日本が一日の長をたのんで同種を陵辱しており、同種をきずつけること、異種よりもとりわけはなはだしいからである。」(p.167) と関東大震災でおきた中国人虐待に対する抗議を中国国民党がおこなった一文の抜粋である。あるいは、「野獣のような日本は、表向きは中日親善の美名にかり、実はひそかに支那を併呑する計画をすすめている。(中略) 論者はいう、大和民族は傲岸偏狭な民族だと。」(p.210, 李長河「対日宣戦についての卑見」) というように大陸侵略が偏狭尊大な民族性と密接な関連があるとの見方があった。とどのつまり、世界一次大戦以降、中国の排外攻撃の対象は敵として中国に敵対していたドイツではなく日本であったのである。上記の発言を見ても分かるように「近代中国の潜在的な友人としての日本のイメージには、すでに傷がついてしまった。」<sup>(註8)</sup> のである。こうした事態に朝太郎は、「お隣の中華民国に比べて国家も人民も日本は少し自惚れ過ぎてゐたし、……その止まるべき所を考えなく拡げ過ぎてゐた処もあつた。」(『哲人支那』著作目録41, p.331) と日本人に反省を促すのであった<sup>(註9)</sup>。

以上のことから、後藤朝太郎の日中民族性比較論が、当時一般の論調から見ると極



めて異質であり、中国人に民族的美点を見いだそうとする彼の態度が日本人批判の視点確保になっていることが了解されたことと思う。

こうした事態に朝太郎は、「何れは将来になつて判ることであるが、実に国に禍ひするのはこの無理解な横柄な態度である。支那人が所謂威張れる日本は滅ぶと喝破したのも、この辺を指すのではないかと思ふ。」(同上書, p.323)と、亡国の声を聞いていた。ただ、軍部がその武力のみを紛争の唯一の解決手段、中国への進出手段(侵略)しているのは、その責任を日本国民と切り離して「軍部」のせいにとすることもできようが、国民全体、大人も子供も「何故に隣人に対しては言葉を慎まなければならないか、人類は互い相愛さなければならぬものであるかという道理を会得して居らない浅ましきである。」(同上書, p.323)という常識的素養も国際感覚を欠如したまま、領土的野心のままに日本が中国を侵略したとしても失敗するのみならず、かえって日本自体が体力を無くして滅ぶという「亡国の声」が聞こえていたのである。さすれば、日中間の問題は唯単に「軍部」だけによって惹起していたのではなく、国民全体の中国観、中国人差別意識にその根本があると朝太郎は考えていたのである。

次いで、後藤朝太郎の中国民族との比較において照射された日本人批判を見てゆくこととしよう。

### 2-3 日本人批判論

国文学の大家、芳賀矢一氏が明治40年に『国民性十論』<sup>(註10)</sup>という日本人論を出版した。この本の解説を書いた久松潜一は「博士が西欧から帰られてまもなく日露戦争が起こり、ロシアを破ってから西欧人も日本に対して新しく関心を持つ様になり、日本の優秀性なることも注目されて来たのである。この気運が国文学の研究者としての芳賀博士をして此の著書を成さしめるに至つた理由であろう。」とのべている。そしてその項目を拾うと「忠君愛国」を第一に置き、以下「祖先を崇び家名を重んずる」、「淡泊瀟洒」「清浄潔白」「温和寛恕」にいたる10項目を掲げる。この書は久松氏によれば「国民性十論が発表されてから此の書の見解はそれ以後の国民性研究に極めて多くの影響を与えた」(同上書, p.4)本であるという。芳賀氏が掲げた日本人の美質が、もし国際的な異文化と接触したとき、もし他者感覚を欠如したとしたらどのような結果を招くのであろうか。実際、もっとも最悪の形で現われたのが中国での日本人の姿であった<sup>(註12)</sup>。後藤朝太郎が、中国民族性論との比較で、日本人の民族性を照らし出す作業を時局、中国趣味の一連の著作のなかで行つたのはまさにそうした日本人の姿の告発であったといえる。かれの日本人論の多くは日本人批判の性格を持っている。たとえば、『眠れる獅子』(著作目録No.47)を見ただけでも、一本調子(p.23)、島国的態度

(p.27) など、果ては日本人論の根幹に関わる「日本魂 (やまとだまし)」については徹底的に批判している (p.131~143)。日本魂という偏狭な考え方を中国で振りかざしている日本及び日本人がいずれ中国という、「眠れる獅子が目覚めたと同じで手ひどい打撃を日本が蒙るに至ることはひをみるより燎らかなことであると思ふ」(p.137) で、その眠れる獅子も「そろそろ目を覚まして来た」と云はゞ云へるのである」(同上) にもかかわらず、日本人があいかわらず日本魂を振り回して日中問題を解決出来ると考えるのは「之れ亦『日本魂』のけちな考え方」(p.139) の発露でしかないと言う。

このほか後藤朝太郎にはどのような日本人批判を行なっていたのか見ていくこととしよう。『支那文化の解剖』第3章「民国人より観たる日本人の欠陥」に挙げているのは、

- 1 日本の立場を説明する華字新聞の発行、現実の中国を分析する機関など対中国文化工作の欠如。
- 2 日本の対中国姿勢が「大陸的気分」を欠如していること。彼の云う「大陸気分」とは中国人と融和しようとする心という最も基盤になる精神を有しないで日本流を押し付けているため、現地で反感を買っていることをいう。
- 3 日本人に事大思想ともいうべき態度があること。
- 4 日本人の社交下手と中国人の社交美

という項目を立てている。彼によれば、こうした対比から、改造しなければならないのは日本人のほうであるという。もっとも日本一国で自足して海外と交渉を持たないのであれば自国のやり方を守ることも出来よう。しかし、「日本民衆の頭を根本的に教育改造して、さうして国民の全体が温かい心情を以て旦那の為を考へ、支那の事を研究し、また同時に其の諒解を得て支那の土地で事を営むといふことに為さなければならぬのである。」(『支那文化の解剖』著作目録No19, p.31) と結論づけている。

満鉄の設立以降、満州での日本の権益が順次拡大するのを受けて、また関東大震災、金融大恐慌などの日本国内の行き詰まりを打開するために、満州にでてゆく日本人の増加がみられた。そうした日本人に対して満州進出が、「日本人のメンタルテスト」の場となると朝太郎はとらえた。しかし朝野の掛け声が、「支那へ、支那へと日本人は支那への進出、発展を口癖の如く唱道するけれども実は支那そのものを恐れて怖がつてゐるものが多い。」(『お隣の支那』著作目録No44, p.183) という状態であれば、現地の人々との往来など望むべくもなく、「多年新聞に雑誌に又パンフレットに著書にと「支那へ」のモットーは国是として日本では高調されていゐるが事実上支那に渡り真に民国人の中に交わり民国人自身と交渉を結んで行く人は幾何あるか。」(同上) というありさまであった。ちなみに朝太郎の著作の中で、たとえば『現在の台湾』(著作目録

No.19),『南洋の華僑』(著作目録No.116)などで海外に根を張る台湾華僑,大陸華僑の成功例を著述するのは,こうした内向き日本への啓蒙を意図している。

### 2-3-2 共食主義

結局,満州進出,中国進出とは言ってみても,場所を中国に移して日本人同士がお互いにその財を食べあうだけのもので,「殊に満鉄の沿線に近い処では日本人は日本の全然延長気分で居られるし日本人同士の共食ひをしてゐる所だけに日本そつくりの安心が得られる。」(『お隣の支那』著作目録No.44, p.186)と日本語で生活し,和服のまま外出できる状態では「これではその第一線に立つて支那人の間に交じり国際生活をなしてゐるのであると云ふ自覚は全く起こらないことになる。」と日本人の国際感覚の欠如を指摘し,日本政府また日本人の満州進出について「とにかく香ばしくない事実をのみ見聞して日本民族の対外進展の第一頁に暗き陰影を投ぜられたる如き感じを得るのである。」(同上, p.187)と失敗を満州国成立以前に予感し,公言を憚らなかった。

また中国へ進出しても「俺は日本人だぞと云ふ頭が強くはたらき,自分の方が支那の国より一段高い所に在るのだぞ,と云ふ気分が必ずある」(同上, p.294)のであり,口では日支親善,同文同種などといっても「其の腹のドン底には国家中心主義または政府を非常に偉いものとする心をどこ迄も有してゐる。支那人から云へば,一種国家主義の,偏した気持ちが考のうちに一ぱいになって居る。」(同上, p.294)と個人主義が徹底している国に,日本の考え方をそのまま持ち込み失敗の原因となっているとみる。日本人は「極端に国家を頼み,一にも二にも国家の補助金を当てにし,国家でなくては夜も日も明けない」(同上, p.295)状態で,移民の際も「先づ移民協会とか,移植民の会社とかが出来る。」(同上, p.295)のをまって出かける有り様で,個人の力で進出しようとしな。移民する先は個人の力量を第一の主義として逞しく活きている風土である。一度其の地に入ると,彼等との競争となるわけだから日本人はかなわないこととなるという。その実例として台湾での30年の状況を例に出して「好い仕事は雑貨商でも醬油商でもすべて本島人とられてしまつた。」(同上, p.332)とし,同じ状況が大連,天津,漢口でもみられ,2万2千人もの在留邦人を抱える上海でも南京路の目抜き通りで店を構えているのは2,3軒しかないという。そして狭められた日本人だけを対象に商売をし生活をするだけである。「顧みるに,支那全体に於ける日人活動の有様や,在支日人の生活状態と云ふものは,人々も唱へて居るが如く共食主義である。」(『支那文化の研究』著作目録No.29, p.708~711)と名付けて批判したのである。したがって大陸進出を行っていても,結局は日本人同士の「共食」の集団の

膨張でしかない。たとえ日本人が「その自尊心と云ひ大和魂と云ひ愛国心と云ひ実は余りに小さすぎるやうに感ぜられてならぬ」(『支那遊記』著作目録No.36, p.832)と当時声高に日本人の世界に誇る優良さ、優越さとしていたものを一刀両断する。問題は中国人民から見れば、自分らの長所としていることが中国人民がどのように見ているのかという「他者感覚」の有無なのである。「日本の場合には日本の長所として考へてゐるところであっても之を支那にあてはめたならば長所と考へられないこともある。」(同上書, p.822)を差別視する大集団が土足で祖国を踏みにじっているような感覚でしか日本を見れず、親近感など湧くはずもないと厳しく日本人を批判している。

#### 2-4 軍部批判

昭和5年に出版された『哲人支那』「威張れる日本は危うし」という1章を立てて日本批判を展開している。朝太郎によれば、その原因は3つあり、(1)武力にのみ頼る日本の無策、(2)ジャーナリズムの誤謬、(3)国民教育の誤り(中国人蔑視)をあげている。ここでは(1)の日本の軍部批判についての論点を見ておけば、「日本は支那に対して何かと云へばすぐ出兵と云ふ、陸戦隊を上陸させたり、軍刀をカチャつかせたりする。」(p.304)この発言が昭和2年第一次山東出兵、昭和3年第二次山東出兵、済南での日中両軍の衝突(済南事件)、これと同時進行して関東軍による中国東北地区での武力侵略、そして張作霖爆殺事件、こうした執筆当時進行していた一連の武力行使を念頭において発言したものであろう。しかし武力による威嚇で中国との問題解決の展望が見えるどころか、ロンドン軍縮会議で日本の武力が制限を受けたり、アメリカと手を組んで日本を押さえつければ日本は何も言えないという国際戦略を中国は採用しているにもかかわらず、また昨今の中国問題は経済戦争であることを理解せず日本は何かにつけて武力で解決を図ろうとしていると批判している。知恵の無いものからすれば唯一の方策かもしれないが「併し支那の多くの人士は「威張れる日本は滅ぶ」と云ふことを口にしていくらいなのである。」(p.304)と中国人の言に仮託しながら亡国の予兆を見ていた。

後藤朝太郎は昭和3年第2次、3次山東出兵のあった年末に、当時の「軍刀をカチャつかせたり」する日本に対して「……お隣の支那が大刀短銃でなくては治まらぬとか出兵じゃなくちや押さえが付かぬとか考えられては溜らぬ。……徒らに、暗い半面にのみ囚われて明るい人間味の動いて居る大局を見ず之と腹で交はる丈の襟度と暖か味のないものは遂に日本を世界の舞台から孤立の位置に陥れる近視眼者流であるような気がしてならぬ。」(『支那秘談 青竜刀』著作目録No.46, 「時局に対する歳末の感」p.460)と軍事による紛争解決が国際的孤立を招く危惧を表明していた。なぜならば、

軍事侵略にひた走る日本は、まさに「日本の撃剣なども強い、柔道も強いには強いが、しかし一人や二人の泥棒の相手なら兎に角、二十人、三十人、五十人、百人といふモップが一時に押し寄せて来たといふのでは、柔道の五段であらうが撃剣の名人であらうが、何の役にたたなくなる。大勢に囲まれては敵はないのである。其のところになると支那人は撃剣も柔道も知らなくても、唯、彼らには宣伝が巧いと云ふ武器がある。」(『大支那の理解』著作目録No.99, p.70)と、武力を唯一の紛争解決手段としている日本と中国人の宣伝戦との様相であり、「日支戦は武力では支那が勝ち味がないと、誠にさうなのであろう。しかし支那としてはそれは始めから決まってる事実である。それだけに窮すれば通ずると方法を案出するであらう。」(『支那を語る』著作目録No.114, p.278)と宣伝戦は国内の愛国主義の鼓舞、排日運動として現われ、もう一方、国際舞台を利用しての中国政府に有利な国際世論を形成となってあらわれる。この宣伝戦の巧拙が世界世論の支持形成と密接に関係し、日中戦争の最終局面を左右するにも関わらず日本はそれに気づかず、支那事変へと突入したのであった。「思ふに国際的の兵力なるものは支那を一時制しえても長年に亘る宣伝戦には拮抗能はざるものである。」(『支那縦断 眠れる獅子』著作目録No.47, p.5)といい、「日本人が武器武器とこの武器をかざすこと以外に大衆に懐かしく向かふ方法方策を国民が考ふるゆとりのないやうなときは、たとへ武器の方のみうまく行つても大局の上で必ずや大陸国策の上にならぬ。」(『大陸の夜明け』著作目録No.116, p.42~43)あるいは「支那の方では武力戦に負けたなどとは思つてゐない。奥地まで引きずり込むことに於いて成功したと云つてゐる位である。」(『四億万のお客様』著作目録No.112, 凡例八則, p.4)と日本が長期戦に引きずり込まれあげく、最後の勝者が中国であることを朝太郎は予言するのであった(『論語と支那の実生活』著作目録No.113, p.197~198も参照のこと)。

### 3 後藤朝太郎評価の再検討

後藤朝太郎の民族学における評価を前論では澤田瑞穂氏の発言に代表させてみてみた。このほか後藤朝太郎を論じたものに三石善吉「後藤朝太郎と井上紅梅」<sup>(註13)</sup>があり、後藤朝太郎の立場は現実の中国に対して全くの盲目であり、「せいぜい、高等趣味人の表面的な「支那漫遊」記にすぎないのである。」(p.32)と低い評価であり、

「支那民族の生命は、実に、この支那文化に偉大な所にある」「文化の上には国境を考えたくない」(『支那文化の解剖』)という視覚からは、日本(軍部)の中国侵略と中国の民族主義とを同時に相関的にとらえる視角はでてこない。これは内藤

湖南などにも見られる文化中心的中国観の共通の欠陥である。(同上書、同頁) という。そして変化する中国への視点が無く、「確かに後藤は明治大正期につくりあげた文人趣味の中国像から一步も脱しえなかった。自らつくりあげた幻想に完全に呪縛されていた」(同上) というのが後藤朝太郎の本質であるとする。ここでいう朝太郎の「文化の上に国境を考へたくない」という言葉をそのまま異文化としての「他者感覚」のなさを示す指標とし、江戸以来の「支那趣味」の系譜に繋がる文化中心的中国観の欠点とみるのが、現在でも後藤朝太郎あるいは支那通全般にあてはまる評価である。

ここで立ち止まって考えなければならないのは「文人趣味の中国像」と軽々に使用するこの言葉である。いったい日本における中国趣味とは「何だったのか」。たしかに後藤朝太郎が田中貢太郎、米田祐太郎らとともに支那通三太郎として日本における支那趣味の盛行の一翼をになっていた。その支那趣味の多くが猥奇・艶情・怪奇ものであった。しかし、こうした趣味を支持した当時の日本人の心情を反映したものであった。大正の末に関東大震災により帝都が崩壊し、自国の不況、金融恐慌などからくる社会の閉塞感が、支那物に限らず、猥奇・エロ・グロを題材としたものが流行した時代であった。ただ中国が「謎の国」のイメージをもった隣国であったため、格好の興味の対象とされたわけである。いわば日本人の自己内部のゆがんだ心情が投影されて、中国に猥奇・エロ・グロの題材を求めたのであった<sup>(註14)</sup>。

後藤朝太郎の昭和3年に出版された『阿片室』(著作目録No45)『青竜刀』(著作目録No46)『眠れる獅子』(著作目録No47)を代表作とする、風俗物や男女もの(著作目録No79, 90)そして、『不老長生』(No36)をはじめとする長生不老もの(著作No51, 94)など書名から判断すると、まさに猥奇・エロ・グロものを期待させるものが並んでいる。これに対してどのように考えればよいのであろうか。一つは朝太郎が企図した中国文化の総合的研究(彼の用語によれば「支那学」)の一分野の成果報告である。もう一つの理由は、世間の支那興味の戦略的利用があったものと思われる。現在、書名に魅かれてそれらを読んでみてもそこに描写されているのは猥奇的にも深刻な記述はなく、どれも「支那に関心を持つもの支那に同情を持つものであつてもらひたい。」(『四億人の御客様』著作目録、凡例八則、p.4)がために採った戦略ではないかと思われる。あくまでその心情は大正10年の「文化の上には国境を考へたくない。東洋の文化を営んでゐる隣人である。……和楽のうちに双方の文化生活を了解しなくてはならぬ。支那から日本を誤解してゐる点も勿論あるが日本から支那を誤解してゐる方が多い。寧ろこは日本人が支那の実際社会を知らないのに帰因する。……自分は新聞に雑誌に著述に講義講演に、或は東洋協会の事業に出来得るかぎりこの方面の発展に犬馬の勞をとりたいのである。」という初念を最後まで一貫して持ち続けたものと言える。

また、三石氏は当時の五・四運動、共産党運動に対する後藤朝太郎の冷淡さをもって、彼への低い評価ともしている。当時、中国民衆の農民組織運動と中国共産党の成立に注目し、それに高い評価を与えることができたならば、後藤朝太郎は高い評価を与えられたのかも知れない。しかし三石氏が後藤朝太郎、あるいは支那通を評価する基準について論ずるならば、そこに1949年の中国共産党による新中国の成立という契機を媒介にしていることも今や指摘せざるを得ないであろう。論評する側が後世のもののみが知りうる歴史的事実を評価基準として歴史を断罪しているのではなかろうか。

当時、盛行した凡百の支那論、支那紀行文との比較によってその差異をあぶり出す作業を経ずに後世の確定した事実から断罪するなら、やはりその論評も時代とともに断罪されよう。

近年、支那通を再検証する作業が劉家鑫氏によって行われた。そのなかで「後藤朝太郎は全面肯定または全面否定のできない、ある程度の積極的意味を持った自由主義的「支那通」文人である。」<sup>(註15)</sup> (p.25) と朝太郎評価の軌道修正が行われた。文化工作重視、軍部の独走の批判者といった面での肯定面をあげながらも、しかし基本的評価は「自由主義的「支那通」文人の幼稚とその国際政治観とりわけ日中関係論の天真未熟を指摘しなければならない。」(同上, p.25) と断じている。はたして当時の「支那通」がどのような働きをすれば満点を与えられたのであろうか。三石氏の基本的視座を継承して、劉氏は後藤朝太郎に減点するため、昭和12年(1937)の支那事変を境に思想的变化がみられたと分析している。そして朝太郎は「すっかり日本の侵略行為を粉飾し、日本をアジアの解放者、守護神として奉る発言になった。」(同上, p.16) になったのだという。このことは「戦時中における一知識人としての、思想的な敗北を意味している。」(同上, p.17) と断罪する。

はたして、劉氏の言うよう朝太郎は変節したのであろうか。論者は一例を挙げてこの見方に疑問を呈したいと思う。後藤朝太郎の時局に関する著作は、昭和16年を境に新しいものは出ていない。『大陸の夜明け』(著作目録No.116)が最後であろう。当時の言論統制などが相当厳しくなったことも影響しているものと思われる。又この年、『論語と支那の実生活』(著作目録No.113)を出版しており、現代中国に暮らす中国人を通して『論語』を読み直した体裁になっている。「里仁第四」の「徳不孤」章に日本人の海外進出の例を挙げ、いつもの共食主義を批判しているにもかかわらず、最後の一段落を満州国での王道楽土実現を称賛し、「これほどにしてあればこそ日本人は大きい腕を振って満州の国土に闊歩してゐられる訳である。これだから不平の出ようがないのである。」(同書, p.82) と述べている。

古典『論語』を題材にすることで時局性を隠し、前後から見ると突然の論旨の逆転

という、言わばとってつけた形での当局礼賛という構成にして検閲を逃れ、言論統制の網の目を朝太郎は掻い潜ろうとしたものだといえよう。

もし読み手に、こうした微言大義、行間を読む態度があれば、容易に支那事変の行く末が、仮に中国の軍事戦での敗北、日本の統治となったところで或いは満州国が日本の巨大な投資がなされていてもその将来が「肝腎の生活は支那に屈服した形になる。」「政治は支那人の手に取り返されてしまふ。」のが「支那古今の通則」（以上すべて同上書、「人無遠慮、必有近憂」章、p.197～8）であるという朝太郎の予言も正しく読み取れるであろう。

支那通と呼ばれた人たちの行動様式の変化を歴史の中から抽出する作業をある評価基準から肯定・否定の価値を付与しつつ行うのであればはたして、自分が由って立つ評価基準に対する検証と基準の表明が必要であろう。今は歴史の裁判官として振る舞うには検証不足である。

たとえば、魯迅「灯下漫筆」に「外国人のうち、知らずに讚美しているものは、怒せる。」「一つは中国人は劣等種族であって、……もう一つは自分の旅行の興味を増すためには、……中国に来れば辮髪が見られる。…という具合であるのが望ましく、もしも服飾が同じだと、さっぱり面白味がないとあって、アジアの欧化に反対する人々である。これらはいずれも憎むべきである。」（松枝茂夫他編『魯迅選集』第五巻、『墳』所収、p.190）と魯迅の外個人の中国理解に3つの立場があるとのべている。この分類からいえば、朝太郎は、世の中の国がそれぞれ違っていることで自分の旅行の興味を増してくれることを期待する知の帝国主義者たる中国理解の立場であって、朝太郎の見た「楽天」生活を送る下層民が「当分安全に奴隷になりおおせた時代」（同上、p.185）の「楽天」でしかなく、たとえ中国の文化・文明をほめたたえる人々も中国趣味に魅了されただけのことで、そこに喘ぐ人民の姿などかえって眼中になかった、と論じることもできよう。しかし、魯迅が批判することと、魯迅に拠って批判することは意味が違うのである。

また、朝太郎が「楽天」生活の一例としてよく例に出す苦力が微笑しながら、鳥カゴをもって河辺で夕涼みしている写真がある（『支那の社会層』著作目録No.32）。このこともそこに庶民の生活を愛情をもって写し、平和を愛する象徴、ゆとりある生活の象徴としてもちいていた。これと竹内実が、「我に対立して彼を確立した点で、それは近代的なりアリズムの萌芽と考えることができるのではないか」（p.304）として、漱石の写生が叙情と写生を融合させる筆致の視点を評価するくだりに、明治40年の文章に中村是公が、汚い支那人が2、3人、奇麗な鳥籠を提げて遣って来たのを評して「支那人て奴は風雅なものだよ。着るものもない貧乏人の癖に、あゝやつて、鳥をぶら下



げて、山の中をまご付いて、鳥籠を樹の枝に釣るして、其下に坐つて、食ふものも食はずに大人しく聞いてゐるんだよ。……あゝ実に風雅なものだよ、と頻りに支那人を賞めてゐる。余はポケットからゼムを出して呑んだ。」とあって、中村是公の言には、中国人民を一種愛おしむ視点が現されている、とした（竹内 実『日本人にとっての中国像』1966, 春秋社, p.303～304）。満鉄総裁が夏目漱石によって描写されると、中国人という人間を発見した段落が評価の対象にもなる。

さて後藤朝太郎の見た、苦力の微笑が、当分安全に奴隷になりおおせた者の「楽天」なのか。中国人も同じ人として「発見」された「楽天」なのか。また後藤朝太郎の日中民族性比較論とは何だったのか。本章では後藤朝太郎評価の再検討の必要性を認めて一旦、筆を擱くこととしよう<sup>(註16)</sup>

今後、いままで「支那通」ということばにつきまとう胡散臭さ故に研究対象されてこなかったが、胡散臭さが歓迎された戦前日本の対中国認識のあり方、あるいは「支那通」とよばれる知識人の対中国認識を通して日本近代思想史を論じ得るものと思われる。

#### 4 おわりに

三石氏によれば、昭和2年から昭和18年までを後藤の第3期とし、「安易な中国紹介ゆえに、のちのちまで軽蔑のマナゴで見られるようになったのも、この期の活動によるところが大きい」とされる。本論考では三石氏が第3期とされ、「ほとんど価値のない大量の出版物」から朝太郎の日中民族性比較論と日本人批判の主張をもう一度見てみることからはじめた。はたして三石氏のいうような「支那漫遊記」にしかすぎないのか再検討してみたわけである。結論として「高級知識人の限界」(三石)とする否定的評価を一度保留し、支那通達の実態をもう一度検証するところまで戻る必要性を指摘したものである。なお、後藤朝太郎の初意・発念が、当時の「高級知識人の限界」まで日中相互理解に努力を払ったものであることは論じたつもりである。従来否定的に語られる彼の業績がゆえに、いささか再検討の材料を提供したわけである。

また後藤朝太郎はじめ支那通と呼ばれる人々が戦後、研究者に断罪されて、そのあとの無視という状況に、彼らの評価問題については再検討の余地があることを論じた。

後藤朝太郎は、特高、憲兵に尾行取り調べにあい、自分の身を危険にさらしながら日本人をいさめた。そして今や忘れ去られた。彼にとってはそれはどうでも良いことだろう。ただ、彼が念願した日中両国民の相互理解が当時と較べて何歩か前進したといえるのか、論者は時として目を閉じて自問せざるを得ない。

## 注

- (注1) 「後藤朝太郎の支那学の構想」(『九州産業大学国際文化学部紀要』第19号, 九州産業大学国際文化学部, 平成13(2001)年)
- (注2) 小川運平『支那及び支那人』東亜堂書房, 明治44年
- (注3) 先行する観点が果たして著者が目途しているか否か, 支那論, 支那民族性論の類の著者類では殆ど相互検証に検証不可能である。これらの殆どすべてはみな自分の観察眼によって記述し, 一切議論の蓄積がなされないという特徴をもつからである。まさに「自分の眼」に映じた中国が「真実」であり, 他人は他人という打ちっ放しの大砲のようなものである。ゆえに「民族論」の類が概ね学問的にならず, 時代とともに同工異曲の著作が再生産されることとなるのである。そして現在の中国人論も, 留学体験記, 商社勤務何十年, 在日中国人らの体験記が「自分の体験」というその人にとって動かしがたい事実ではあるが, 一回性の体験を普遍的に語る構図にあるといえる。むしろ日中民族論はなぜそれが論じられなければならないのかという問い掛けこそ意味を持つのではないかと思われる。
- (注4) 服部字之吉『支那研究』明治出版社, 大正5年, pp.164~170
- (注5) 鳥山喜一『支那・支那人』岩波書店, 岩波新書, 昭和17年, p.30
- (注6) 長谷川良之助『支那国民性の研究』大坂屋号書店, 大正12年, p.8~99
- (注7) 小嶋晋治・伊藤昭雄・光岡 玄共著『中国人の日本人観100年史』自由国民社, 1974
- (注8) アレンS. ホワイティング著岡部達味訳『中国人の日本観』岩波書店, 2000年, p.55
- (注9) 『お隣の中国』p.194, p.290にも同様の意見が見える。
- (注10) 芳賀矢一『国民性十論』富山房, 昭和13年
- (注11) 同上書, 解説p.1。船曳建夫『「日本人論」再考』(日本放送協会, 2002年, p.13)によれば, なおこの時期, 多数の日本人論が書かれた経緯, とくに日本人西欧に遅れて近代的国家の歩みをはじめた焦り或いは劣等感が日清・日露戦争での勝利が, そうした心情が反転し, 日本の独自性に関する強い肯定的主張が生まれた原因になったという。
- (注12) 芳賀氏の『国民性十論』は決して偏狭な国粹主義のものでなく, また本書結語に「凡そ一箇人としても, その人の長所は直に短所である。我民族の美徳の底には亦必ずその欠点の潜んでいることも知らねばならぬ。世界の舞台に出た以上は亦それだけの覚悟が必要である。」(p.136)と警告を発している炯眼も併せて記しておかねばならないであろう。
- (注13) 竹内好・橋川文三編『近代日本と中国』所収, 1974, 朝日新聞社
- (注14) 平凡社『発禁本』I II III (別冊太陽, 2002年2月10日)参照。後藤朝太郎の『支那の男と女』も発禁指定を受けたという。(I, p.139)
- (注15) 劉家鑫「「支那通」後藤朝太郎の中国認識」(『環日本海研究年報』, 1993)及び劉家鑫「後藤朝太郎の日中関係論」(『現代社会文化研究』第11号, 1998, 新潟大学大学院現代社会文化研究科)
- (注16) 荻野脩二氏によって「支那通」という現象についてその歴史上に果たした役割から世代区分し, 沢村幸夫について論じる作業をも現われた。「支那通」について」(『中国研究月報』554, 中国研究所, 1994)「魯迅と合わなかった「支那通」一沢村幸夫について」(『立命館国際研究』VOL.6, 1993)先ほどの例でいえば「魯迅と合わなかった, ある「支那通」という歴史的事実を通して沢村幸夫を論じて, 魯迅と合わなかったこと自体, 沢村の評価と一度分離している。この論文によって漸く研究の対象として「支那通」が分析対象となったものといえよう。

## 後藤朝太郎著作目録（単行本）

## 凡例

1. 後藤朝太郎の著作にかかる単行本および編著、校閲、監修の著書目録である。雑誌、分担執筆、辞書項目執筆は含まない。
2. 今次、直接目睹することが出来なかったものについては昭和18年の『文字の研究』及び『大陸の夜明け』の巻末の著作目録等により作成した。備考欄に「\*」を付したものがそれである。ただ、彼の著作巻末にある著作目録は無数の誤りがあり、これに依ったものについては後日訂正を要するものと思われる。

No.		発行所	発行年月日	備 考
1	『言語学』上・下	博文館	1906(明治39)年12月8日 1907(明治40)年4月29日	上巻(金沢庄三郎との共訳)* 下巻(金沢庄三郎との共訳)*
2	『現代支那語学』	博文館	1908(明治41)年2月18日	*
3	『漢字音の系統』	六合館	1909(明治42)年6月13日	明治42年12月15日再版 大正4年10月15日再訂増補版4版
4	『教育上より見たる 明治の漢字』	宝文館	1910(明治43)年1月13日	
5	『文字の研究』	成美堂	1910(明治43)年2月10日	No.117は増訂版
6	『日用と教育上に於ける文字の活用』	六合館	1910(明治43)年9月5日	明治43年9月10日発行 10月10日再版
7	『文字の沿革』(建築編)	成美堂	1915(大正4)年10月15日	
8	『漢字の教授法』	春秋堂	1912(明治45)年7月10日	*
9	『教壇上の漢字』	学海指針社	1913(大正2)年7月5日	後藤朝太郎校閲, 林勇著
10	『線音双引漢和大辞典』	東雲堂	1914(大正3)年5月2日	*
11	『文字の訓練』	泰山房	1916(大正5)年2月15日	
12	『ペン習字手本講話』	泰山房	1916(大正5)年5月25日	後藤朝太郎編著, 畠中愷夫筆
13	『文字の起源』	通俗大学会	1916(大正5)年5月29日	*
14	『文字の沿革』	日本大学	1916(大正5)年5月29日	大正15年5月10日発行 発行所: 日本大学 発売所: 巖翠堂書店
15	『支那の文物』	科外教育叢書刊行會	1918(大正7)年1月25日	
16	『文字の教へ方』	二松堂	1918(大正7)年2月22日	*
17	『自修辞典』	東雲堂	1919(大正8)年4月15日	*
18	『現在の台湾』	白水社	1920(大正9)年8月31日	
19	『支那文化の解剖』	大阪屋號書店	1921(大正10)年4月10日	
20	『淮南子』	国民文庫刊行會	1921(大正10)年4月11日	* 国訳漢文大成
21	『硯の葉』	白水社	1921(大正10)年6月20日	*
22	『支那料理の前に』	大阪屋號書店	1922(大正11)年5月10日	

No		発行所	発行年月日	備考
23	『長城の彼方』	大阪屋號書店	1922(大正11)年5月10日	*
24	『日本より支那へ』	北隆館	1922(大正13)年10月23日	
25	『おもしろい支那の風俗』	大阪屋號書店	1923(大正12)年8月5日	
26	『支那趣味の話』	大阪屋號書店	1924(大正13)年9月5日	昭和2年増補版発行
27	『歓楽の支那』	北隆館	1925(大正14)年3月25日	
28	『支那観察旅行の改善』	東亜研究会	1925(大正14)年4月1日	* 東亜研究講座・其二
29	『支那文化の研究』	富山房	1925(大正14)年6月29日	
30	『支那田舎めぐり』	北隆館	1925(大正14)年9月1日	
31	『武漢三鎮游記』	東亜研究会	1926(大正15)年10月22日	* 東亜研究講座・其11
32	『支那の社会相』	雄山閣	1926(大正15)年11月15日	
33	『長久の支那』	北隆館	1927(昭和2)年1月17日	発行所：日本郵船株式会社営業部船客課
34	『五十年後の太平洋』	大阪毎日・東京日々新聞社	1927(昭和2)年1月20日	*
35	『標準字典』	中文館	1927(昭和2)年2月10日	*
36	『不老長生』	北隆館	1927(昭和2)年6月7日	*
37	『支那今日の社会相と文化』	文明協会	1927(昭和2)年6月15日	
38	『支那国民性講話』	巖翠堂	1927(昭和2)年8月10日	
39	『支那風俗の話』	大阪屋號書店	1927(昭和2)年9月15日	
40	『支那行脚記』	万里閣書房	1927(昭和2)年11月3日	12月15日3版
41	『老朋友』	北隆館	1927(昭和2)年12月10日	発行所：日本郵船株式会社営業部船客課
42	『支那遊記』	春陽堂	1927(昭和2)年12月25日	昭和7年6月25日10版
43	『支那風景と庭園』	雄山閣	1928(昭和3)年3月10日	
44	『お隣の支那』	大阪屋號書店	1928(昭和3)年9月15日	
45	『支那秘談 阿片室』	万里閣書房	1928(昭和3)年2月20日	昭和3年5月10日8版
46	『支那縦談 青龍刀』	万里閣書房	1928(昭和3)年12月10日	昭和4年1月5日6版
47	『支那綺談 眠れる獅子』	万里閣書房	1929(昭和4)年5月20日	昭和4年6月5日5版
48	『支那料理通』	四六書院	1930(昭和5)年1月6日	昭和5年1月25日3版
49	『中華民国地図』	神谷書店	1929(昭和4)年12月3日	*
50	『翰墨談』	富士書房	1929(昭和4)年5月10日	*
51	『支那長生秘術』	富士書房	1929(昭和4)年12月15日	昭和4年12月21日4版
52	『支那旅行通』	四六書院	1930(昭和5)年3月10日	
53	『支那風俗趣味』	万里閣書房	1930(昭和5)年5月15日	
54	『大支那大系 第八巻 風俗趣味編』	万里閣書房	1930(昭和5)年5月20日	
55	『支那民情を語る』	雄山閣	1930(昭和5)年6月15日	No.32の増補版

後藤朝太郎の日中民族性比較論

No.		発行所	発行年月日	備考
56	『文学の史的研究』	雄山閣	1930(昭和5)年3月25日	書道講座第4回配本
57	『硯及筆墨紙研究』	雄山閣	1930(昭和5)年9月10日	
58	『支那社会民情』	万里閣書房	1930(昭和5)年10月15日	*
59	『大支那大系 第六卷 社会民情編』	万里閣書房	1930(昭和5)年10月20日	
60	『支那労働階級の生活』	三省堂	1930(昭和5)年10月28日	*
61	『哲人支那』	千倉書房	1930(昭和5)年11月5日	
62	『漢字の生い立ち』	日本放送局	1930(昭和5)年12月10日	*
63	『支那の国民性と時局』貴族院定例餐会講演集(54)		1931(昭和6)年10月15日	*
64	『翰墨行脚』	春陽堂	1931(昭和6)年11月25日	
65	『時局を縫らす 支那の民情』	千倉書房	1931(昭和6)年11月20日	昭和6年11月25日35版
66	『支那及満州旅行案内』	春陽堂	1932(昭和7)年5月15日	
67	『支那読本』	立命館出版部	1933(昭和8)年3月25日	昭和8年5月10日7版
68	『満支の全局を支配する日露の動き』	日本工業倶楽部・経済研究会	1933(昭和8)年7月	*経済研究叢書(51)
69	『問題の支那?』	立命館出版部	1932(昭和7)年7月12日	
70	『支那の体臭』	汎文社	1933(昭和8)年9月15日	昭和8年10月20日再版
71	『文字学概説』(国語科学)	明治書院	1933(昭和8)年10月1日	*
72	『支那の山水』	嵩山房	1933(昭和8)年12月10日	
73	『漢支風景庭園鑑』	成美堂	1934(昭和9)年3月7日	*
74	『支那庭園』	成美堂	1934(昭和9)年10月10日	*
75	『文字の研究』	関書院	1935(昭和10)年1月28日	*
76	『支那風土記』	章華社	1935(昭和10)年2月13日	改版:昭和13年2月8日発行 発行所:八洲書房 発売所:上田屋書店
77	『翰墨談』	翰墨同好会・南有書院	1935(昭和10)年6月18日	No.50の抄本
78	『満支視察ありのまま』	人文研究所	1935(昭和10)年8月28日	*非売品
79	『支那家庭論語』	現代文化社	1935(昭和10)年11月25日	
80	『日支親善工作』	国際日本協会	1936(昭和11)年1月20日	*
81	『初等漢字の教え方(一名漢字の覚え方)』	関書院	1936(昭和11)年4月30日	7月27日再版
82	『支那民族の展望』	富山房	1936(昭和11)年5月18日	
83	『不祥事と日支親善への途』	文明協会	1936(昭和11)年9月28日	*非売品
84	『支那秘境を巡りて』	東京経済倶楽部	1936(昭和11)年11月14日	*非売品
85	『文字行脚』	知進社	1936(昭和11)年11月30日	非売品
86	『最近の中華民国を語る』	医科器械学会	1937(昭和12)年1月	*非売品
87	『改訂漢字音の系統』	関書院	1937(昭和12)年2月13日	No.3(六合出版)の改訂版

No.		発行所	発行年月日	備考
88	『文房至宝』	雄山閣	1937(昭和12)年7月1日	
89	『土匪村行脚』	北斗書房	1937(昭和12)年7月1日	
90	『上海戦と支那国民性』	日本講演 通信社	1937(昭和12)年9月15日	*
91	『支那の男と女 現代支那の生活相』	大東出版社	1937(昭和12)年9月28日	昭和13年10月13日国策版発行 昭和13年10月31日国策第5版
92	『支那の山寺』	黄河書院	1937(昭和12)年12月5日	
93	『不老長生の秘訣』	大東出版社	1937(昭和12)年12月10日	昭和13年12月30日『大陸支那不老長生秘話』と改題し国策版発行
94	『茶道支那行脚』	大日本出版 社峯文荘	1938(昭和13)年2月1日	
95	『最近支那旅行案内』	黄河書院	1938(昭和13)年2月1日	昭和15年3月5日改訂増補版
96	『支那を知れ』	雄風館	1938(昭和13)年6月13日	
97	『支那の民情風俗』	満蒙学校 出版部	1938(昭和13)年9月1日	昭和15年5月10日再版
98	『大支那の理解』	高陽書院	1938(昭和13)年9月16日	昭和13年11月15日5版
99	『長江千里』	高陽書院	1938(昭和13)年10月31日	
100	『面白い国支那』	高陽書院	1938(昭和13)年12月13日	
101	『狐竹高山長幸』	狐竹会	1938(昭和13)年12月13日	非売品
102	『隣邦支那』	今日の問題社	1939(昭和13)年12月18日	
103	『支那経済夜話』	東洋経済 新報社	1939(昭和14)年1月23日	
104	『支那へ行く知識』	高陽書院	1939(昭和14)年3月15日	
105	『書道用具の心得』	峯文荘	1939(昭和14)年7月10日	*
106	『文字の起源と沿革』	峯文社	1939(昭和14)年7月10日	
107	『支那の下層民』	高山書院	1939(昭和14)年10月5日	
108	『建設に甦る新支那大観』	常総新聞社	1939(昭和14)年10月10日	後藤朝太郎・志岐守治監修
109	『支那の土豪』	高山書院	1940(昭和15)年2月28日	
110	『支那生活案内』	黄河書院	1940(昭和15)年2月25日	
111	『最新支那旅行案内』	黄河書院	1940(昭和15)年3月5日	
112	『四億萬の御客様』	明光堂	1940(昭和15)年3月30日	昭和15年4月5日10版
113	『論語と支那の実生活』	高陽書院	1941(昭和16)年6月28日	
114	『支那を語る』	今日の問題社	1941(昭和16)年9月15日	
115	『硯と筆』	大東出版社	1941(昭和16)年9月20日	
116	『大陸の夜明け』	高山書院	1941(昭和16)年10月18日	
117	『支那風物詩(一)風景編』	大東出版社	1942(昭和17)年5月10日	3500部
118	『南洋の華僑』	高山書院	1942(昭和17)年5月25日	
119	『仏印・泰・支那 言語の交流』	大東出版社	1942(昭和17)年6月20日	2500部
120	『文字の研究』	森北書店	1942(昭和17)年10月1日	No.4の増補改版 昭和18年8月20日再版

後藤朝太郎の日中民族性比較論

No.		発行所	発行年月日	備 考
121	『文字講話』	黄河書院	1943(昭和18)年1月18日	昭和18年3月30日再版
122	『支那書道』	黄河書院	1943(昭和18)年4月18日	
123	『支那風物詩(二)民芸編』	大東出版社	1943(昭和18)年9月20日	*
124	『文学史(一)』	高山書院	1943(昭和18)年10月30日	
125	『文学史(二)』	高山書院	1943(昭和18)年10月30日	*
126	『支那汲古録(古文字の生い立ち)』	黄河書院	1943(昭和18)年12月31日	
	硯墨趣味の研究	東亜研究会	1932(昭和7)年6月29日	出版未確認のため番外